アジア地域の原子力利用と日本の貢献

東京大学大学院 田中明彦

アジアは一つになりつつある

かつて岡倉天心が、1903年にロンドンで出版した『東洋の理想』The Ideals of the East で、「アジアは一つである」Asia is one.と語ったことは、よく知られています。彼は、アジアの美術史の観点から、日本にアジアの美術の粋が集まっていることを主に論じたわけで、政治的・経済的にアジアが一つであると言ったわけではありません。しかし、それから1世紀を隔てた今日は、アジアは、一つになりつつある、と言ってもいいのではないのでしょうか。様々な問題を抱えつつも、アジアの経済は、相互に緊密な結びつきをもちつつ、力強い成長を遂げています。中国の台頭とか、インドの台頭とかいわれますが、私はアジア全体が台頭しているのだと思えてなりません。日本から朝鮮半島、中国、インドシナ半島さらには、インド、オーストラリアまでの巨大な地域が、経済的な結びつきを強めつつ、台頭しているのだと思います。

しかし、このアジアの台頭は、世界にとってもアジアの人々にとっても大きなチャレンジです。まず何よりも、これはエネルギー需要の増大をもたらします。そして、このエネルギー需要の増大は、当面、化石燃料への需要の増大を生み出します。しかし、すでに科学的研究や様々な自然の兆候が示しているように、化石燃料の大量消費による地球温暖化の危険は、日々強まっています。

化石燃料の消費をこれ以上継続的に増加させることはできません。来月の洞爺湖サミットでは、2050年までに温暖化ガスを50%削減することが議論され、さらに中期の目標の合意に向けた様々な話し合いが行われます。温暖化ガスの削減は必要ですし、そのためのエネルギーの効率的利用も必要ですが、エネルギー利用それ自体をやめるわけにはいきません。化石燃料以外のエネルギーが必要とされます。まさにアジアにおいて、原子力の利用拡大が真剣に考慮されるゆえんです。他の代替エネルギーと並んで、原子力の平和利用の拡大は、必然的ともいいうる必要性を生み出していると思います。

しかし、原子力の平和利用には、他の代替エネルギーとは異なるいくつかの要素があります。核兵器との関係です。その点を考察していかなければなりません。しかし、その具体的な問題については、本シンポジウムで深くつつこんで議論されると思われますので、ここでは、その前提として、まず、現在のアジアの国際関係について、少し振り返ってみたいと思います。

現在のアジアの特徴は何でしょうか。先ほど、アジアは一つになりつつある、と申しましたが、これが最も明白に現れているのは、経済の面です。しかし、

経済がアジア大で結びつきを強めているのには、政治的な理由もあります。

それは、1970年代後半以後、アジア各国の政治的外交的関係が正常化に向かい、平和の領域が拡大していったことです。1979年の中越戦争以後、国家間戦争は、東アジアでは発生していません。また、1991年のカンボジア和平以後、東アジアでは、大規模な内戦も起きなくなりました。めざましい経済成長は、平和があったからこそ実現できたと言えると思います。

しかし、アジアは完全に平和であると言い切ることはできません。冷戦後の西欧のように、国家間戦争も内戦も、ほとんど全く考えられないようになった地域と比べると、アジアは、まだまだ不安定です。北朝鮮の核兵器開発や弾道ミサイル開発は、東北アジア地域に深刻な安全保障問題をもたらしていますし、世界的な核兵器や弾道ミサイルの拡散の危険を生み出しています。台湾で馬英九政権が誕生し、台湾海峡は当面安定化の方向に向かっていますが、全面的に安定したとはまだ言い切れない側面があります。ミャンマーの軍事独裁政権は、依然として各国と正常な関係を持つことができない状態です。また、様々な国でナショナリズムが他国との関係に緊張をもたらす状態も続いています。アジアから中東地域までを視野にいれば、イランにおける核開発の問題もありますし、イラク情勢もまだまだ困難な状態が続いています。

さらに、国家関係の問題と並んで、テロリズムという新たな安全保障問題にも注目しなければなりません。テロリズム自体は、歴史に常に存在してきた問題ですが、9.11事件が示したように、21世紀の今日、その危険は、かつてのそれを遥かに凌駕するようになって来ています。アジアにおいても、各地でテロリズムの危険は続いています。なんとといっても、アフガニスタン情勢は、依然として安定化に向かっておらず、アフガニスタンとパキスタンの部族地域にひそむアルカイード勢力は、依然として無視できません。

つまり、アジアは、全般的な平和と目覚ましい経済成長のもとにあるとあって良いと思いますが、安全保障上の問題には依然として深刻なものがあると言えると思います。第1に北朝鮮やイランの核開発の問題、第2にアフガニスタン情勢、さらにこれと並ぶパキスタンの安定の問題、第3にテロリズムの問題などには、常に注視していかなければならないと思います。そして、このように考える時、これらのほとんどすべての問題に原子力が関連していることに築かざるをえません。

北朝鮮の核開発の問題は、日本にとっては、それ自体が安全保障上の脅威ですが、世界全体ということで見ても、核拡散を防ぐという観点から極めて重要です。これまでの6カ国協議の枠組みで粘り強い交渉が行われてきていますが、

核施設の無能力化と核開発プログラムの完全な申告という「初期段階」の措置を越えて、全面的な核兵器プログラムの放棄に向かうよう継続的に北朝鮮に求めていく必要があります。

また、テロリストの脅威ということを考慮にいれるとき、核兵器がテロリストに渡ることは、なんとしても阻止しなければなりません。平和利用を目的とする原子力施設についても、テロリストにこれを攻撃されたり、放射性物質をテロリストに渡すことは防がなければなりません。

また、これは国家間とか人間のもたらす安全保障の問題ではありませんが、大地震などの大災害という自然がもたらす安全の問題も、原子力には密接に関連してきます。つまり、原子力施設の安全は、テロリストからも守らなければいけません。自然災害からも守らなければなりません。原子力施設の安全性は、人口密集地域の多いアジアにおいてはとりわけ重要です。

このように核拡散の問題、原子力施設の安全性確保の問題はありますが、原子力の平和利用をやめるわけにはいきません。すでに述べたように、温暖化ガスの大幅な削減を実現するためには、アジアでエネルギー需要が急拡大する国々での原子力の平和利用の増大が不可欠です。従って、今後の課題は、核拡散を防ぎつつ、また、施設の安全を確保しつつ、原子力の平和利用をアジア諸国に広めるかということになります。

このようなアジアにおける原子力平和利用の問題を考えると、日本の果たしうる役割は大きいと思います。日本は、核兵器を持たず、作らず、持ち込ませずという非核三原則のもと、一貫して、原子力の平和利用を追求してきました。現在、電力量の約半分が原子力発電によってまかなわれるまで担っています。核不拡散の観点からも、IAEAには最も協力的な国であり続けていると思います。また、日本における国民の原子力施設の安全に関する関心は、極めて高く、その面でも、原子力施設を如何に安全に運営するかについての経験も多いと思います。また、世界でも有数の地震発生国としての経験もあります。国民の目からみれば、安全面で、まだまだ努力しなければならない点は多々ありますが、それでも、核開発せずに、安全に原子力の平和利用を行って来たという日本の経験は、他の国々にも参考となる面は多いと思います。

今後の課題は、やはり、国際的な協力の枠組みをどのように確立していくかということだと思います。世界的に言えば、IAEAなどの国際機関を中心とした活動をさらに進め、アメリカが提唱している GNEP などの取り組みに積極的に参加していくことだと思います。

特に重要なことは、アジアにおいて、今後どのような国際協力の枠組みを作っていくかということだと思います。率直に言って、原子力の平和利用に関しては、アジア域内の国際協力の枠組みはまだ未発達だと思います。すでに述べたようなアジア地域の特徴、爆発的な経済成長の可能性と安全保障面での不安定性の併存という特徴は、原子力の平和利用の必要性と共に、核拡散防止・安全確保という必要性も共に要求しています。そのために、各国が個々別々な対策をたてるのではなく、協力できる範囲で最大限の協力をすることが求められています。

アジアにおける原子力平和利用の国際的枠組みを形成する必要性をますます大きくなっています、今回のシンポジウムでは、まさにそのような可能性が議論されることになると思っています。私としては、そのような可能性を追求する機は、熟しつつあるのではないかと思っています。

かつて、アジアでは多国間協力というのはなかなか困難でした。ヨーロッパと違ってアジアには実効的な国際的制度がないとも言われて来ましたが、そのような面は依然としてないわけではありませんが、事態は変化しつつあります。1989年にAPECが誕生、1997年には、ASEAN+3の首脳会議が誕生しました。2005年からは、ASEAN+3にインド、オーストラリア、ニュージーランドが加わって東アジア首脳会議が開催されるようになりました。各国の間で、機能協力を進めるべきだという機運は強まっています。原子力の平和利用こそ、各国が協力すべき一大機能であろうと思います。

アジアの台頭ということを冒頭申し上げました。実は、アジアが台頭するのは21世紀がはじめてではありません。世界史のなかで、アジアが台頭していた時期は、何回かあります。アンガス・マディソン教授の歴史的なGDP推計によれば、1820年の中国のGDPは、世界全体の3割を占めていました。アジアの多くが発展途上国になってしまったのは、産業革命と共に化石燃料を使用が大々的に起こってからのことです。現在、化石燃料の大規模使用を押さえる時代が来つつあります。その中で、アジアは再び台頭しつつあります。マディソン教授の推計では、中国やインドのGDPは、ふたたび18世紀から19世紀初頭の規模になりつつあります。しかし、このアジアの再台頭が、世界に危険を漏らすことなく、地球温暖化をふせぎつつ行うためには、核拡散をふせぎつつ、原子力の平和利用を促進することが不可欠です。化石燃料の時代に停滞したアジアを再台頭させるためには、原子力の平和利用に関する国際協力が何よりも必要です。そのため日本の役割は極めて大きいと思います。